

# 大繁盛する「天国への引越し屋」の仕事現場

08年秋に公開された大ヒットした映画「おくりびと」のおかげで、納棺師という職業についてこんな説明があった。「究極のスキマ産業」——葬儀社ですら目を付けてこなかった「死」にまつわるビジネスが続々と誕生しつつある。

## 要死体を修復するペーパーン納棺師

映画「おくりびと」で取り上げられ、一躍脚光を浴びた納棺師。亡骸を死装束に着替へさせ、死化粧をほどこし棺に納める仕事だ。葬儀社が行なう場合もあるが、これら「納棺の儀」と呼ばれる一連の儀式をとり行なう専門職としてそう呼ばれている。

関東某所で死体の運搬から死化粧、そして納棺の儀などを専門とする会社を経営している佐野氏（仮名）は、自らの仕事についてこう語る。「もちろん熟練の技はあるが、納棺する時の着替への方法は



特に決められてません。要するに、故人の肌が見えなければいい。だからそれぞれの納棺師が企業秘密ではないがいろいろな肌が見え方、着せ方を研究している。私は結構シンブルに掛け布団を使って着替えているところを見せないやり方ですが、魅せる服がせ方や着せ方をパフォーミングとして行なっている人もいると聞きます。」

さらにこう説明する。「普通の遺体の体を試いて着替へさせ、死化粧するぐらいなら本人のやる気さえあれば誰でもできます。そう、普通の遺体だけでしたら」

佐野氏によると、「普通ではない遺体」が増えているという。自殺、孤死など、最近では納棺師もただ家族との美しい別れを演出するだけではすまなくなっている。

佐野氏は、そうした自殺死体や腐乱死体などを運び出し、特殊なファンデーションなどを駆使して可能な範囲で遺骸が見られる顔に、修復し、さらに貨物物の清掃や消臭、遺品整理などまで幅広く手がける。「遺体ビジネス」のバイオニアとして知られる存在なのだ。もとは中野葬儀社で営業を始めていた佐野氏だが、これまで葬儀ビジネスが目を見てこなかった「普通ではない遺体」の処置に可能性を感じ、現在の会社を立ち上げた。

「あなたが管理している物件でもし腐乱死体でたら……日本でも唯一の室内処理専門会社にお任せください」(実際の広告コピーとは一部異なる)

それまでこういうトラブルを解決する専門業者がいなかったというところもあり、次々と依頼が舞い込んだ。その技術はいまや警察にも認められ、「被害者支援地域ネットワーク

悪しくなった。

【別名】遺品整理・室内清掃  
【受付】オンデマンド  
【料金】5000円～1万円まで  
【受付】24時間



半沢氏の遺品整理屋に使用しているマシン類

## ようか

死後、時間が経過して腐敗臭がますます臭い場合、市販のオゾン消臭剤を設置し、同時にこうして死臭の発生菌だけを先に収束する。これによって、だいたい2週間ほどほとんどの死臭を消し去ることができるといふ。

その2週間後、再度その部屋を訪れると、確かにあのすさまじい死臭は驚くほど消えていた。ただし、木目のなかに入れ込んだ体液などはオゾン消臭剤といえども菌がたかないので、その場合はリファーム業者の出番となる。死臭が消えたところで、アルパムや写真、金品、カード

類や直筆のメモなど「遺品」として遺族に渡すもの以外をほとんどポットに詰め込み、トラックに積み込んでいく。乾電池や化粧品、スプレー、薬などは消臭剤のとき呼ばれた、廃棄物処理の方法が異なるので要注意。こう見ると、単なる引越しのようだ。そこで、キーパーズが名付けたのが、「天国へのお引越しのお手伝い」というキャッチコピー。業者は作業を手伝う中で、15年も前のその女性が恋人から受け取った手紙を見つけてしまった。てきぱきと作業していく作業員らのかたわらで、孤死死という地獄を遊んでしまったことを思うと、合計に

「犬の臭い消しをアレンジした事件現場清掃」

キーパーズはあくまで遺品整理が本業で、物件の現状回復や清掃については市販の清掃道具を使っている。それに對し、「清潔」に特化した業者が「事件現場清掃会社」を名乗るA&Tコーポレーションだ。「うちは遺品整理も頼まれればやりますが、基本的には清掃、部屋のクリーニングと必要とあればリファームもやります。とにかく清掃や消臭ならばどこにも負けないという自信があります」

そう語る高江州社長がこの会社をはじめたのは平成8年。ホテルの料理人などをした後、ハウスクリーニングの会社を立ち上げた。その後、遺体処置の現場に需要を感じた彼は、「事件現場清掃会社」を名乗り始める。遺品整理会社と決定的に違うのは、清掃が必要となるような現場、つまり腐乱死体のようなケース

ク」の一端で警察から仕事を受けるようにまでなった。「事件に巻き込まれた死体や殺人の被害者遺体を修復することもあります。司法解剖が終われば、警察医はそれを縫い付けるだけで、遺族に返す。まるでフランケンシュタインみたい。ただでさえ意気消沈している遺族に追い打ちをかけるような酷い有り様です。それを私たちが修復して、見られる顔にするんです」

多い時は週に3体の腐乱死体を見ることもあり、「これはもう熟練の技とか根性とかではなく、単に向き不向きの問題と言っているいかもしれない。だから、ほとんどの人間は辞めていく」と言う佐野氏。しかし、その言葉には、プロとしてのプライドが込められてもいるのだ。

【別名】遺品整理  
【受付】24時間  
【料金】5000円～1万円まで  
【受付】24時間

## 故人の「引越し」を手伝う遺品整理屋

ばかりを扱うということだ。そのため、かなり変わったというか痛ましい「死の現場」に立ち会うことが多い。「遺い炊きながら人浴している最中に亡くなったお婆ちゃんがいって、ひとり暮らしだったこともあって2日間発見されなかった。湯舟の中は、お湯というよりも脂のようになっっていました。お婆ちゃんからの依頼だったんですが、彼女をはじめ孫や子供はみんなその風呂に入っていた。だからその思い出を汚さないように、彼女たちには一切見せないようにして、もとどおりにきれいになりました」

このような凄絶な現場をクリーニングするとすると、さ

すがに市販の洗剤では不可能である。もともとハウスクリーニングの会社なので、そのあたりはプロの技術だろうが、それでも死臭を消すのは難しいのではないだろうか。「いろいろな試行錯誤を繰り返した結果、ブリーチをやっていくる友人からプロが使う大の臭い消しをすすめられて、「これだ!」と思ったんです。それをもとにEMという微生物物を使ったバイオ消臭剤に案のとき、製薬を混ぜて2週間発酵させました。部屋に入って掃除してくださいで、死臭が消えていきます。最近ではそれをさらに改良したものを使っています」

## 屋宇共同開発の遺体防臭スプレー

このように、「ベンチチャー企業」の参入者らしいこの業界だが、さらに新たなトレンドが「屋宇共同開発」である。株式会社アゼックスと三重大学医学部看護学科、大西和子教授によって開発されている「ニュークリーンジェルスプレー」なる商品。外見はごくごく普通のスプレー缶。使い方はいたって簡単。まず、キャップを外してカカカと音が鳴るまでよく振って付属のチューブを装着。そして、その先を遺体の鼻や口に挿入し、5～10秒間スプレーを噴射する。チューブの先端から噴射された特殊な高吸水性ポリマー樹脂の微粉末と防臭剤からなる「液体漏れ防止剤」は遺体内で水分や体液を吸収し速やかにゲル状に変化。口や鼻から流れる体液が外部に出るのを食い止める。おまけに腐敗防止の効果



「死体防臭用」と書かれたニュークリーンジェルスプレー。

があり、実験でも5日間持続することが証明されたという。こうしてドライアイスを用いなくとも遺体が腐ることはなく、顔色や表情は生前に近い自然な状態に保てる。同様の効果は、「エンバミンク」と言われる遺体保存法でも得られるが、業者によるエンバミンクの処置が15万円はかかるのに對し、「ニュークリーンジェルスプレー」はわずか3000円——。

「使用した医療関係者からの評判は良かった。遺体の腐敗防止や感染症にも一定の効果認められました。あちらの看護士たちは使い方がわからないのではないかと、それが一番の心配でしたが、それも問題なかったようです」

開発に携わった大西教授は言う。一方、アゼックスの加藤副社長も「さっそうちも導入したいという病院からすでにいくつか申し出があります」と今後の展望を語ります。いまや「遺体ビジネス」は葬儀業界の枠を超え、医療業界、さらには海外にまで羽ばたきだしたのだ。



「孤独死」の増加はますますこうしたビジネスの需要を高める(産経新聞08年1月8日付)。

「我々のような業者があることは、まだまだ知られていない」という高江州氏が、「究極のスキマ産業」が

【別名】ニュークリーンジェルスプレー  
【料金】3000円